

# ディバインゲート ～クインケとドライバの混合世界～

シュウナ・アカネ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

デイバインゲート、それは人間も、妖精も、魔物も、喰種も目指す場所だった。アーサーは言った。「俺達はデイバインゲートにたどり着く。どんな手を使つてでもたどり着く」と。

これはデイバインゲートと東京喰種の二次創作です。原作と有り得ないほどそれますので、それでも良い方は見えていってください。

目次

聖なる扉は、ある意味開かれた

聖なる扉は、ある意味開かれた

デイバインゲート・・・

それは、聖なる扉とも呼ばれる。

そのデイバインゲートが開かれたことにより、人間たちが暮らす常界、妖精たちが暮らす天界、魔物たちが暮らす魔界が交じわりあい、世界の秩序はことごとく消え去った。それは古来から人間も、喰種も、共に目指す場所であった。

アオギリの樹が誕生する前までは・・・。

アオギリの樹は強力な喰種を寄せ集め、一つの大組織として裏世界の重鎮として暗躍していた。

表世界では世界評議会と喰種対策局が合併し、東京二十三区治安対策評議会が誕生した。

全ては、アオギリの樹を陥落させるために。

そして今日、東京都の20区に新たな門、聖なる扉が開かれた。その門とは・・・

カランカランツ

古間・入見「いらっしやいませ！」

喫茶店”あんていく”の門だった。あんていくは喰種が経営する店で、その店のコーヒーの味に定評がある。喰種捜査官に見つかればただ事ではないのだが・・・

他「古間さん！コーヒー杯お願い！」

古間「はいよ、魔猿スペシャルブレンド！」コトツ

他「古間さん！魔猿の話してくださいよ〜」

古間「お、いいよいいよ！たっぷり語ってあげるよ、僕の輝かしい魔猿の伝説を」

といった状況である。しかも彼・古間円児か話している相手は喰種捜査官である。本来、喰種捜査官にとって喰種は駆逐対象である。しかもこの古間円児は魔猿と呼ばれたSSレートの喰種で、駆逐すると巨額の懸賞金が出る。そんな彼に敵対心すら見せない喰種捜査官。それは、あるものによってその駆逐対象はアオギリの樹に所属する喰

種のに絞られた。そのあるものとは・・・

あんでいく・二階にて

月山「トレ!!!ビアンツ!!なんだこの味は!僕の舌をなめらかに覆い  
尽くす芳醇なハマモニイイ(香り)！」

部屋の奥から恍惚の声が響く。この部屋の中には5人。恍惚の声を漏らした彼は月山習。別称「美食家(グルメ)」。Sレート喰種でかなりの変人。

月山「このシチューこそ究極の美食!ああ、思えば僕は人間の肉で  
美食を追い求めていた・・・が!今は違う!この“野菜”の美食を追い  
求めることこそ僕の生きるmean(意味)！」

そう。今まで喰種は人間の食すものを最も苦手としており、口にすれば強烈な吐き気に襲われる。それが食せるようになった。

カネキ「月山さん少し黙って下さい、一階のお客さんに響きます。  
あと本に集中できません」

アカネ「そうだぞ七三分け!ミドリとイチヤイチャしてろよ!」  
白髪の青年・金木研ことカネキが月山を軽く叱責し、赤髪の少年・  
アカネが強く叱責(?)する。

月山「相変わらずカネキ君はワーニングボーイだね。あとアカネ君  
はちゃんと僕の名前呼んでくれないかな?」

月山が悲しげな表情をアカネに見せる。扉から緑髪の少女・ミドリ  
がコーヒーを5人分運んできた。

ミドリ「そうよアカネ!月山さんは先輩だよ?あとイチヤイチャは  
余計!」

コーヒーを配りながらトゲトゲしい態度でアカネを咎める。

アカネ「なっ!聞こえてたのかよ!?!」

ミドリ「ふん、私の聴力バカにしないでよね」

アカネがチエツと舌打ちをしてそっぽを向く。

月山「いや、いいのだよトルミドリ。僕と君は後でpillow  
salesを」

ミドリ「やめてください、変態」

月山「変態?心外だな。仮にそうさせているのは君なのだから、君

が責任を取り「ませんよ」・・・僕の負けだ、リトルミドリ・・・」  
アカネ「へっ！ざまあ見ろ七三！」

アカネが月山に勝ち誇ったような顔を見せる。月山はそれを見て膝をつき腕も地面についた。

月山「僕の完敗だ・・・idiot me (愚かな僕)」

アカネがニヤニヤしながら月山を見つめている。

ベデイヴィア「アカネ君！」

アカネ「うおっ!？」

急な大声にアカネが驚く。ベデイヴィアが口を膨らませながらアカネを見ている。

アカネ「ベデイヴィアさん急に叫ばないでくれよ！」

ベデイヴィア「私じゃ・・・ダメなんですか？」

アカネ「・・・へ？」

ベデイヴィア「私とイチャイチャしたくないんですか!？」

ベデイヴィアの顔が真っ赤になり涙目になっている。表向きでは分からないが、アカネとベデイヴィアはどうやら付き合っているらしい。本当かどうかは全く分からないが・・・。

アカネ「し、したいけどさ・・・カネキがいるじゃん!？」

カネキに指を指しながら答える。

カネキ「そこを僕に振る!？」

かなり驚愕した顔になる。まさか振ってくるとは思ってもいなかっただろう。

アカネ「カネキがいるとイチャイチャしづらいんだよ！」

カネキ「僕だつてトーカちゃんとラブラブしたいよ！でも最近トーカちゃんにジトジトした目で見られるから精神的にかなりきついんだよ!？」

一応カネキとトーカちゃんは付き合っている。声が大きすぎてしまったのだろう。扉の奥から、

トーカ「うるさいクソカネキ！」ドンツッ!

シーンッ

トーカちゃんこと霧嶋董香がカネキを扉越しで怒鳴りつけ扉を

殴った。

カネキ「……………」

アカネ「……………なあカネキ」

カネキ「……………何？」

アカネ「……………手打ちにしよう」

カネキ「……………うん」

月山さんも再度シチューに虜になってるしベデイヴィアはまだプルプルしながら涙目だしミドリはヤレヤレと言わんばかりの表情を浮かべている。

アカネ「んでミドリ、アオトはまだ来ないのかよ？」

ミドリ「え？もう来てるはずだけど」

コンツコンツ

誰かがこの部屋の扉をノックした。アオトだろうか。

アーサー「失礼するぞ」アオト「失礼します」

ミドリ「ほら、アオトいたじゃん」

男が2人入ってきた。1人は今話題に出てた金髪の少年・アオト。そしてもう1人が、

アカネ「アーサー……………」

ミドリ「アーサーさん！」

彼は、東京二十三区治安対策評議会の中の世界評議会・常界代表のアーサーであった。

アーサー「久しぶりだな、カネキ」

カネキ「お久しぶりです、アーサー先生」

月山「ミスターアーサー、僕に挨拶は？」

アーサー「ああ、そうだったな。美食家」

月山「半年ぶりかな？こうした形で会うのは」

アーサー「ああ、手合わせをしてからだからな。コーヒーを淹れてくれるか？」

ミドリ「は、はい！」

立っていたアーサーとアオトは空いている席に腰を下ろす。

ミドリ「どうぞ」コトツ

アーサーとアオトはミドリの淹れたコーヒーを口に流し込む。

アーサー「ふう、生き返る。あんでいくのコーヒーが一番美味しい香りもいい」

アオト「美味しい」

ここにアーサーが来るということは並大抵の用事ではないことは分かっていた。

カネキ「何かあったんですか？」

アーサー「お前らに、アオギリ所属の喰種、ナキとその手下共を駆逐して貰いたい」

ナキは月山習と同じ甲赫でSレートの喰種。かなりの強者であることは間違いない。

アカネ「ナキ・・・喰種収容所コクリアの輸送車から脱走したっていうあのナキか？」

ミドリ「Sレートって、私たちだけで倒せるんですか？ドライバはありますけど・・・」

世界評議会のアカデミーはドライバを所持している。必ずしも強力なドライバと言うわけでもないが、戦闘には必須である。

カネキ「大丈夫、僕と月山さんがいる」

月山「僕らの別名を、忘れたかい？」

アオト「眼帯と美食家・・・どちらもSレート以上」

月山習はSレートだが、カネキに至ってはSSレートである。

カネキ「でもアーサー先生、何故ナキを倒すことを選んだんですか？」

アーサー「今ならそれがいいと判断したからだ。六聖人には無理を言っただけ目を瞑ってもらった。これで邪魔者は入ったりしましだい」

六聖人は、いわば世界評議会でも最も権力のある部分。

現に東京二十三区治安対策評議会のトップでもある。喰種対策局のトップは六聖人の管轄下に置かれている。

アーサーが立ち上がり、自分の信念を語り始めた。

アーサー「俺は必ず、デイベインゲートにたどり着く。アオギリが到着する前に、どんな手を使ってでもたどり着く」



アオト「じゃあ、作戦会議を」  
アーサー「ああ、今から作戦ブリーフィングを始める」  
物語は、まだ始まったばかりだ――。

あんていく・閉店前

カランカランツ

芳村「いらっしやいませ・・・なんだ、君か」

店長・芳村さんの前にいたのは、

サンタクローズ「久しぶりだな、フクロウさん」

子供の味方だった。